

パーラ王朝の諸王が建立した 四大仏教寺院

藤田光寛

1. はじめに

約8世紀から12世紀まで、インド東方のビハール (Bihar)、ベンガル (Bengal) などの地域 (今のほぼインド国のビハール州と西ベンガル州、バングラデシュ国に相当) を支配したパーラ王朝は、仏教やヒンドゥー教を保護したので、仏教ではインド後期仏教の密教が栄えた。インド東方はインド仏教の最後の拠点の1つであった。

パーラ王朝は、12世紀初期にヒンドゥー教徒のセーナ王朝のVijayasena王に取って代わられた。そして、13世紀初頭 (1203年頃) のトルコ系のイスラム教徒の軍隊によるVikramasīla寺の破壊によって、インド仏教はインドから姿を消していったとされる。この約450年間にわたるパーラ王朝のもとで、仏教が保護され、有名な多くの学僧が輩出し、仏教文化、仏教芸術が栄えたのである。

さて、私は、平成3年12月21日から平成4年1月7日までの約3週間、高野山大学密教文化研究所がバングラデシュで実施した第2回バングラデシュ密教学術調査の一員に加えて頂き、Dhaka、Comilla、Bogra、Rajshahiとその近郊の仏教遺跡、博物館などを訪れ、Somapuri寺などの密教遺跡・遺品の調査に従事する機会に恵まれた。そこで、今は、パーラ王朝の諸王が建立した4の仏教寺院、及びそれらに所属した仏教僧たちの概要を明らかにして、インド仏教の最後の拠点の1つであったパーラ王朝における仏教のあり方の一端を窺いたい。

その手続きとしては、インド語碑銘、インド語写本の奥書などの歴史史料やSandhyākaranandin作<Rāmacaritam> (Rāmapāla王の伝記) などのインド側の資料、並びにチベット語で書かれたインド仏教史をはじめとする歴史書や、『チベット大蔵経』に収められたKanjur (仏説部) とTanjur (論疏部) の諸著作の奥書 (post colophon) に述べられた記述などのチベット語資料を参酌する必要がある。

この観点から著された『優れた研究に、Sukumar Dutt 著、*Buddhist Monks and Monasteries of India* (1962; Delhi, 1988) があるが、若干の訂正や補充されるべき個

所がある。又、今から約30年ほど前にバングラデシュを調査した貴重な報告、村主恵快氏「東パキスタンの仏教遺跡と仏教徒の現状」（『密教学』4、昭42）等もある。

ここではこの S. Dutt 氏などの研究や、前者のインド側の資料の研究に基づく成果を参照しつつ、それだけではなくて、後者のチベット語資料、特に『チベット大蔵経』に収められた Kanjur（仏説部）と Tanjur（論疏部）の諸著作の奥書（post colophon）を通覧し、そこに述べられた記述を中心に検討することによって、前述の課題を整理しまとめておきたい。

この各著作の最後に付された奥書では、単に著者の名前（e.g. 大阿闍梨…、パండిタ…、大学者…、等）や、翻訳者名・校訂者名（e.g. インドの学匠・パండిタ…、大校閲翻訳官・比丘…、等）を述べるだけの場合が多いが、時々、これらの名前の前にその出身地や所属寺院を前置したり、そのテキストの著作された場所や翻訳された場所などの説明を加えた奥書がみられ、インド・チベット仏教史を研究する際の貴重な資料の1つである。

2. 歴史資料としての『チベット大蔵経』所収の各著作の奥書

A. 先ず、その奥書にみられる用例の若干を以下に挙げておく。

著作場所や翻訳場所などを述べた用例として次のようなものがある。

དབྱུ་མ་འབྲུག་པ་འཛོམས་པ་ (Madhyamaka-bhrama-ghāta, 中観迷乱摧破, D.3850, P.5250) は、Nālandā Mahāvihāra で著された。即ち、この著作の奥書では、「大阿闍梨 Āryadeva が著作なさったものが終わる。インドの学匠 Dipamkaraśrījñāna (Atiśa) と翻訳官・比丘 Tshul khriims rgyal ba (ཚུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་པ་, ナクツォ翻訳官) が翻訳して校閲した。Jambudvīpa (インド) の王 Sukhācārya (別名 Udayī, Sadvaha⁽¹⁾) によって、Nālandā Mahāvihāra において、請われたので著作なさった、と聞く」と述べられ、この作品が Nālandā Mahāvihāra で著されたと言う伝承を伝えている。

又、འཛིན་རྟེན་ལས་འདས་པའི་ཡན་ལག་བདུན་པའི་ཚོ་ག་ (Lokātita-saptāṅga-vidhi, 超世間七支儀軌, D.4486, P.5399; Cf. D.2461, P.3289) の奥書では、「阿闍梨・大学者 དཔལ་མར་མེ་མཛད་ཡེ་ཤེས་ (Atiśa) が、サムイエー (དཔལ་མར་མེ་ཡས་) の ལྷུན་གྲིས་གྲུབ་པ་ Mahāvihāra において著作なさった འཛིན་རྟེན་ལས་འདས་པའི་ཡན་ལག་བདུན་པའི་ཚོ་ག་ が終わる」とあり、Atiśa がサムイエー寺で著しなされたことが分かる。

同じく Atiśa は、སླིང་པོ་དེས་མར་བསྐྱས་པ་ (Hṛdaya-nikṣepa, 心髓要集, D.4470, P.5383; Cf. D.3950, P.5346) をチベットのウー (དབུས་, 衛) にある、ネタン (སྟེ་ཐང་) の Vihāra

で著作したことが、その奥書に述べられている。

Bhavabhadra 作 *འཕགས་མ་སྐྱེལ་མའི་དཀྱིལ་འཕྲོ་ལ་འདུག་པའི་བྱ་བ་* (*Ārya-tārā-maṅḍalāva-tāra-krtyā*、聖多羅母曼荼羅入所作、D.3675,P.4497) は、Vimalakirti と Grub pa dpal bzañ po (*གུབ་པ་དཔལ་བཟང་པོ་*) によって「Nepal の都城カトマンドゥ (*Kathmandu*) の西方 *Ni ma* (*ཉི་མ་*) の *Vihāra* で、翻訳し、校閲し決撰」された。

Amarasiṃha 作の辞書 *འཆི་བ་མེད་པའི་མཛོད་* (*Amarakoṣa*、無死蔵、D.4299, P.5787) は *Mahāpaṇḍita 'Kirticandra* 御前と、ヤルルン (*ཡར་ལུང་ས་*) 出身の *Grags pa rgyal mtshan* (*གྲགས་པ་རྒྱལ་མཚན་*) によって、ネパールの都城 *Kathmandu* において翻訳された。(これは後に、第一回目は *Chos skyoṅs bzañ po* (*ཆོས་སྐྱོང་ས་བཟང་པོ་*, 1441-1528) により、第二回目は *Chos kyi hbyuñ gnas* (*ཆོས་ཀྱི་འབྲུང་གནས་*) or *Gtsug lag chos kyi snañ ba* (*གཏུག་ལག་ཆོས་ཀྱི་སྣང་བ་*, 17世紀) によって改訂された。)

Nāgārjuna 作 *མི་གེ་བརྒྱ་པ་ཞེས་བྱ་བའི་འགྲེལ་བ་* (*Akṣara-śataka-nāma-vṛtti*、百字と名づくる法、D.3835, P.5235) は、カシュミールの都城 *dpe med* (*དཔེ་མེད་*) において、*Pañ chen Gshon nu śes rab* (*པཎེན་ལྷ་ཤེས་རབ་*) によって翻訳され、後に *Paṇḍita Ānanda* と翻訳官 *Grags hbyor śes rab* (*གྲགས་པ་འབྲུར་ཤེས་རབ་*) によって校閲された。

Bhavya 作 *དབྱུང་མའི་སྒྲིང་པོའི་ཆོག་ལེའུར་བྱས་པ་* (*Madhyamaka-hṛdaya-kārikā*、中観心頌、D.3855,P.5255) は、ラサ (*Lhasa*) のトゥルナン (*འབྲུལ་སྒྲུང་*) *Vihāra* において、*Atiśa* と翻訳官・比丘 *Tshul khriṃs rgyal ba* (*ཚུལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་པ་*) によって、翻訳、校閲、決撰がなされた。

Bengal 地方に生まれた阿闍梨 *Prajñāvarman* (*ཤེས་རབ་ལོ་ཚེ་འཇ*) 作 *བྱོད་པའི་རྒྱ་ཆེར་བཤད་པ་* (*Viśeṣa-stava-nāma-tikā*、殊勝讚広釈、D.1110, P.2002) は、インドの学匠・パンディタ *Jārandana* と大校閲翻訳官・比丘 *Rin chen bzañ po* (*རིན་ཆེན་བཟང་པོ་*, 958-1055) によって翻訳され校閲されたが、その間の12偈頌分の解説に対応するインド本を得なかったので、後に *Kun dgañ rgyal mtshan dpal bzañ po* (*ཀུན་དགའ་རྒྱལ་མཚན་དཔལ་བཟང་པོ་*) といわれる *Śākya* の比丘が、サキヤ (*དཔལ་ས་སྐྱུ་*) の僧院 (*དཀོན་པ་*) において、(その不足分を集めて) 作ったのである。

尊者 *Mahiman* 作の *རིགས་ཀྱི་འཛིན་རྟེན་མགོན་པོའི་སྐུ་བ་ཐབས་ཀྱི་སྣང་བ་* (*Kula-lokanāthasādhana-loka*、種世間主成就法光、D.2133, P.2984) は、インドの学匠 *Dharmadhara* とヤルルン (*ཡར་ལུང་ས་*) 出身の *Grags pa rgyal mtshan* (*གྲགས་པ་རྒྱལ་མཚན་*) が、サキヤ (*དཔལ་ས་སྐྱུ་*) の *Vihāra* において翻訳された。

以上、著作場所や翻訳場所等を述べた用例の若干を紹介した。

B. 次に、その人の出身地を述べた用例としては、スリランカの Jayabhadrā⁽³⁾ (D. 1406, P. 2122 の奥書)、ザンスカル (Zaṅs dkar) の Ḥphags pa śes rab (འཕགས་པ་ཤེས་རབ་, D. 2689, P. 3513 の奥書)、インドのベナレス (Benares) のパンディタ Puruṣottama (D. 3125, P. 3946 の奥書)、ネパールの Mahāpāna (D. 3136, P. 3957 の奥書)、カシュミールのパンディタ Tilaka-kalaśa (D. 3940, P. 5336 の奥書)、ベンガル (Bengal) の阿闍梨 Dipaṅkaraśrījñāna (Atiśa) (D. 1295, P. 2418 の奥書)、ベンガル地方の阿闍梨 Lūyipa (D. 1427, P. 2144 の奥書) 等がある。

C. その人の所属寺院を述べた用例としては、インド東方の Jagaddala Vihāra の Vibhūticandra (D. 3880, P. 5282 の奥書)、Vikramaśīla Vihāra の Mahāpaṇḍita・比丘 Vairocanarakṣita (D. 3943, P. 5339 の奥書) 等がある。

3. パーラ王朝における仏教寺院

パーラ王朝の支配下にはいる以前のこの地域の様子は、玄奘が『大唐西域記』で報告している。即ち、プシュヤプーティ朝のハルシャヴァルダナ王（戒日王、606-647在位）の治世中にインドを訪れた玄奘は、639年頃に Puṇḍravardhana（今の Rajshahi, Dinajpur, Bogra）、Kāmarūpa（今の Assam 西部）、Samatata（今の Comilla 一帯）の方面へと回り、その国勢を概観して、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の様子も述べている。

それ以後のパーラ王朝のもとで仏教研究センターであった大寺といえ、Nālandā 寺（グプタ王朝とパーラ王朝における約450年—1100年頃）、Vajrāsana（金剛宝座、ボードガヤー）、Odantapuri 寺、Vikramaśīla 寺の四大寺院が有名である。

更に、これら以外に、パーラ王朝において仏教が盛んであった主な所を挙げると、

(1) Traikūṭaka (ཚ་ཀུཏ་ཀ་)

西ベンガルの Rādhā 地方にある。Dharmapāla 王に招かれた Haribhadra は、この Traikūṭaka-vihāra (ཚ་ཀུཏ་ཀ་འཇིག་རྟེན་གྱི་འཇིག་ཁང་) で〈現観莊嚴經論〉の註釈書 *Abhisamayālaṅkālaṅkā* (D. 3791, P. 5189) を著した⁽⁴⁾。ターラナータによると、Mahāpāla 王 (Mahipāla 王の息子) は41年間統治して、Somapuri、Nālandā やこの Trikaṭuka-vihāra に、多くの道場を建立したという⁽⁵⁾。

(2) Devikoṭa (ལྷ་མེད་འཇིག་ཁང་)

北ベンガルの町 Dinajpur から南へ約29キロの Bangarh 村にある。この Vihāra に



ヴァジュラヨーギー村にたつアティーシャ生誕一千年記念の石柱

が建てられている。

上記以外の、インド東方の Vihāra については、例えば、Dipak Kumar Barua 著、*Vihāras in Ancient India* (Calcutta, 1969) に挙げられている。

これら以外に、パーラ王朝の諸王によって建立された寺院としては、次の4の大寺院がある⁽¹⁴⁾。

- 初代 Gopāla 1 世（8世紀中頃）が建立した (a) Odantapuri Mahāvihāra,
- 第2代 Dharmapāla 王（770-810年頃在位）が建立した (b) Vikramaśīla Mahāvihāra,
- 第3代 Devapāla 王（810-850年頃在位）が建立した (c) Somapuri Mahāvihāra,
- 第14代 Rāmapāla 王（1077-1120年頃在位）が建立した (d) Jagaddala Mahāvihāra。

以下ではこのパーラ王朝の4人の王によって建立された4の大寺を概観する。

4. Odantapuri 寺

そこで、まずは今のインド国ビハール州にあった Odantapuri Mahāvihāra から見てみたい。

Odantapurī Mahāvihāra はインドのビハール州 Nalanda 地区（以前の Patna 地区）の Uddandapura (Bihar Sharif) にあるものとされる。未発掘である。この Odantapurī 寺は、パーラ王朝の初代 Gopāla 1 世（8 世紀中頃）によって建立された。チベットでティソン・デツェン（ཐི་སོན་དེ་ཙན་ལེན་）王が Śāntarakṣita を招き、775年から12年間をかけてサムイェー（མམམ་ཡེ་མ་）の大伽藍を建立した時にモデルにしたのが、この Odantapurī 寺であると伝えられる。

因に、5 世紀前半にグプタ王朝の第 5 代 Śakrāditya 王 (Kumāragupta 1 世) によって創建された Nālandā Mahāvihāra (インド国ビハール州 Patna の南東約 80.5 キロ。グプタ王朝、パーラ王朝の保護を受けて約 600 年ほど続く) は、この近くで、約 9.6 キロ離れている。

アティーシャ (Atiśa) はここで 2 年間滞在し、Dharmarakṣa から Mahāvībhāṣā (大毘婆沙) を学んだ⁽¹⁵⁾。その後、Vikramaśīla 寺でその学頭を務めた。又、例えば、Odantapurī 寺で説一切有部から出家した Ratnākaraśānti は、Vikramaśīla 寺で顕教密教を聴聞して学び、Vikramaśīla の六賢門の 1 人であった。Somapurī 寺の住職にも任命されたという⁽¹⁶⁾。

このように、1 ヶ寺においてだけではなく、Magadha の諸寺院を勉強しながら往来した僧侶が多い。

Rāmapāla 王 (約 1077-1220 年頃在位) の頃でさえも、常に一千の比丘がおいでになり、大乘小乗の二部があり、時々、出家者が集まって来て 1 万 2 千人にもなる、と伝えられる⁽¹⁷⁾。しかし、11 世紀の初めには、この Odantapurī 寺と Vikramaśīla 寺は既に衰退しつつあった、という見解もある⁽¹⁸⁾。

12 世紀末には Odantapurī 寺が、13 世紀初頭には Vikramaśīla 寺などが、イスラム教徒のバクティヤール・カルジー王とその軍隊によって襲撃された。チベット僧 Dharmasvāmin (ཐམ་ཚུལ་ལོ་མོ་ལོ་མོ་ལོ་མོ་ལོ་མོ་、1197-1264) が 1234 年から 36 年にかけて、インドを巡礼した時、ここはイスラム教徒の軍事司令官の住居として使われていた。更に、Vikramaśīla 寺は、その礎石がガンジス河に投げ捨てられ、徹底的に破壊されていた、と報告している⁽¹⁹⁾。

5. Vikramaśīla 寺

Vikramaśīla Mahāvihāra はインドのビハール州 Bhagalpur 地区の Antichak 村にある。第 2 代 Dharmapāla 王 (約 770-810 年頃在位) によって建立された。Vikramaśīla

とは Dharmapāla の別名であるとも言われる。中央に大きな仏殿とその周囲に107の堂宇が建立され、そして50の道場が設立されていて、Prajñāpāramitā と Guhyasamāja が非常に普及していたという⁽²⁰⁾。

ターラナータは、Vikramaśīla 寺で活躍した僧侶のうち、10世紀後期から11世紀前期に活躍した有名な Vikramaśīla の六賢門 (མཁའ་མཁའ་མཁའ་མཁའ་མཁའ་) より以前の、真言家の阿闍梨として、次の12人を挙げて解説している。つまり、Buddhajñānapāda, Dipaṃkarabhadra, スリランカの Jayabhadra, Śrīdhara, Bhavabhadra, Bhavyakīrti, Līlavajra, Durjayacandra, Kṛṣṇasamayavajra, Tathāgataraḥṣita, Bodhibhadra, Kamalarakṣita である⁽²¹⁾。

Bheyapāla (Bhayapāla) 王 (983-1015年頃) の時代とされる Vikramaśīla の六賢門は、Ratnākaraśānti (Śāntipa, 東門)、Vāgīśvarakīrti (西門 or 南門)、Prajñākaramati (南門 or 西門)、Nāropa (北門)、Ratnavajra (北の第一門)、Jñānaśrimitra (北の第二門) の6人の学匠である⁽²²⁾。

ターラナータは、この六賢門の後の Vikramaśīla で活躍した学匠として、Dipaṃkaraśrījñāna (Atīśa, ボードガヤーや Odantapuri 寺などで、小乗・大乘仏教や密教を学び、Vikramaśīla 寺の学頭 (座主) をつとめた。D.3948 (P.5344) の奥書には、Bengal の王の家系であり、比丘・大学匠にして、菩薩行をなさる Dipaṃkaraśrījñāna が著作なされたもの、とある)、Mahāvajrāsana, Kamalakulīśa, Narendraśrījñāna, Dānarakṣita, Abhayākaragupta (第14代 Rāmapāla 王 (1077-1120年頃在位) によって Vajrāsana (金剛宝座、ボードガヤー) の座主に招かれ、それから多年が経過してのち、Vikramaśīla と Nālandā の座主に招かれる)、Śubhākaragupta, Sunayakapaśrī, Dharmākaraśānti, Śākyaśrībhadra を挙げて解説している⁽²²⁾。

チベット出身のこの上述のパンディタ Śākyaśrībhadra (1140年頃-1225年) は、Vikramaśīla 寺の最後の学頭であったが、イスラム教徒の侵攻によって、Vikramaśīla 寺から Jagaddala 寺に逃れ、そこでしばらく滞在したのち、13世紀初め、チベットに入国した。チベットのサキヤ派のみならず、チベット仏教一般に大きな影響を与えた人である。

これ以外に、Vikramaśīla において大衆部の長老をなされたネパール出身の Buddhaśrī、顕密両方に精通し、Vikramaśīla で真言の阿闍梨をなされた Ratnarakṣita⁽²³⁾ 等、多くの学匠がこの Vikramaśīla で活躍した。

20 A. そこで、『チベット大蔵経』の奥書において、「Vikramaśīla 寺で著作された」

という記述がなされているものの例を更に若干あげると、次のようなものがある。

Mahāpāla 王の時代に Vr̥kṣapuri と名づくる立派な住処が贈られ、Vikramaśīla のパ
ンディタの資格も贈呈された Jitāri⁽²⁴⁾ については、D.3899=D.4547 (P.5296=P.5461=
P.5867、བདེ་བར་གཤེགས་པ་གཞུང་རྣམ་པར་འབྱེད་པའི་ཚིག་ལེངས་བྱས་པ་、Sugatamata-vibhaṅga-
kārikā、善逝本分別頌)の奥書で、Bengal でお生まれになった大学者 Jitāri が著作なさ
ったもの、とある。

Vairocanarakṣita (11世紀) については、D.3875B (P.5277、བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་སྤྱོད་
པལ་འཇུག་པའི་དཀའ་འབྲེལ་、Bodhisattva-caryāvatāra-pañjikā、入菩薩行難語積)の奥書
で、Vikramaśīla Vihāra の Mahāpaṇḍita にして比丘の Vairocanarakṣita が著作なさ
ったもの、とある。

Vīryaśrimitra については、D.1585 (P.2296、དེ་ལོ་ན་ཉིད་ཡི་སེམས་ཡང་དག་པར་གྲུབ་པའི་རྒྱ་ཚེར་
འབྲེལ་བ་དེ་ལོ་ན་ཉིད་བཤད་པ་、Marmakārikā-nāma-tattva-jñāna-samsiddhi-pañjikā、真性
智慧正成就広注真性積)の奥書で、Vikramaśīla Mahāvihāra の Mahāpaṇḍita にして
比丘の Vīryaśrimitra が著作なさったもの、とある。

Mañjuśrī については、D.3305 (P.5012、རྗེ་རྗེ་སྒྲོབ་དཔོན་གྱི་བྱ་བ་ཀུན་ལས་བརྟམ་པ་、Vajrācā-
rya-kriyāsamuccaya、金剛阿闍梨作法集)の奥書で、Vikramaśīla の Mahāpaṇḍita
Mañjuśrī とチベットの翻訳官 Blo gros rgyal mtshan dpal bzañ po(བློ་གྲོས་རྒྱལ་མཚན་དཔལ་
བཟང་པོ་) が翻訳し、校閲して、決択した、とある⁽²⁵⁾等。

B. 又、Vikramaśīla 寺でチベット語に翻訳された著作は、その奥書によると、次
のようなものもあるが、タントラ部の論疏が多い。

Guhyasamājantra 関係の成就法(ལྷ་བ་གསལ་བ་ 著 Vajrasattva-sādhana རྗེ་རྗེ་སེམས་
དཔའི་སྐབ་ཐབས་、金剛薩埵成就法、D.1814, P.2678)、

Samvaratantra 関係の論疏(ལྷ་བ་གཞེན་རྒྱ་ 著 Śri-herukābhyudaya-mahāyoginī-tantra-
rāja-katipayākṣara-pañjikā、དཔལ་ལྡན་རྩ་ག་མངོན་པར་འབྱུང་བ་རྣལ་འབྱོར་མའི་རྒྱུད་གྱི་རྒྱལ་པོ་ཚེན་པོའི་
དཀའ་འབྲེལ་ཡི་གེ་རྒྱུར་རྩ་、へーカル現生ヨーギニータントラ難語積小字、D.1421, P.2138)、

四タントラ部に共通の意趣積にして善住と護摩と聚論の部類に属する著作 (Atiśa 著
Kāya-vāk-citta-supratīṣṭhā སྐྱུ་དང་གསུང་དང་བྱུགས་རབ་རྩ་གནས་པ་、身口意善住、D.2496, P.
3322)、

四タントラ部に共通の意趣積にして Dohā 等の部類に属する著作 (Atiśa 著 Samsāra-
manoniryāṅikāra-nāma-saṅgiti、འཕྲོ་བ་ལས་ཡིད་ངེས་པར་འབྱུང་བར་བྱེད་པ་ལེས་བྱ་བའི་གྲུ་、輪廻
出離意と名づく歌、D.2313=D.4473, P.3152)、

四タントラ部に共通の意趣積にして種々のマンダラ儀軌（Abhayākara Gupta 著 *Va-jrāvali-nāma-maṇḍalavidhi*、 $\text{འཇིག་འཕྲོལ་གྱི་ཚེ་གཞི་རྩེད་པ་}$ 、マンダラ儀軌金剛鬘、D.3140, P.3961）、

その他、タントラ部の論疏である D.1695(P.2567), D.2013(P.2868), D.2302(P.5049) の奥書も、Vikramaśīla 寺で翻訳されたことを述べている。

このように Vikramaśīla には、各地から多くの学僧がやって来て 勉学と修行に励んだ。チベットからも多く やって来ていて、チベット仏教との交流も活発であった。逆に、ここからチベットに入国した僧侶も多い。そして、ここで仏典テキストの著作やチベット語への翻訳も行われた。Vikramaśīla は、パーラ王朝の諸王によって保護された王立の大学問寺、仏教文化の大センターの1つであったのである。

Rāmapāla 王の頃でも、160人ばかりのパンディタと常においでになる比丘一千人がいて、供養などの時々五千の出家者が集まった⁽²⁶⁾ この Vikramaśīla 寺も、イスラム教徒の軍隊によって、1203年頃に破壊された。僧侶たちは、ネパール、チベット、西南、南方へ、ビルマ、カンボジアの方へ逃げていった。この時点をもって、インド仏教はインドの Magadha からその姿を消していったとされる。(インド仏教はヒンドゥー世界の上に成立し発展していたので、次第にそのヒンドゥー世界に吸収されていったのが、仏教衰退の主なる内的要因である⁽²⁷⁾。仏教の左道密教化が、仏教衰退の原因ではない。)

6. Somapuri 寺

第3代 Devapāla 王(810-850年頃在位)が建立した Somapuri Mahāvihāra は、現在のバングラデシュ国、Rajshahi 地区、Bogra の町から西約60キロの Paharpur 村の Paharpur 遺跡の中にある。Paharpur 出土のテラコッタ印章銘文には「Śrī-Dharmapāladeva-mahāvihāre」と記されているが、これは、Devapāla 王が自分の父 Dharmapāla 王の名前を記してその徳を讃えたものとみなされている⁽²⁸⁾。

この遺跡は19世紀初頭から調査されていたが、1934年に K.N. Dikshit による Paharpur 遺跡の発掘調査が終り、1938年、K.N. Dikshit による膨大な報告書が出版された (K.N. Dikshit, *Excavations at Paharpur, Bengal (=Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 55) (Delhi 1938)*)。これはそれまでの調査結果を集大成したものである。



ソーマプリー大寺跡

ここから出土した479年に遡る銅板や、639年にこの地域 (Pundravardhana) を訪れた玄奘⁽²⁹⁾の記述から、以前はジャイナ教の寺院であったが、Pāla 王朝の王によって、修理、改造され、仏教寺院として改築されたのが、この Somapuri Mahāvihāra である⁽³⁰⁾。

その遺跡のなかで最大のものは Somapuri Mahāvihāra である。東西約280メートル、南北約281メートルの、広大な正方形の寺院である。その中央にはピラミッドのような高塔がそびえ、多くの奉献塔や小祠堂、四辺には回廊状に合計117の僧房があった。

このような寺院形式は東南アジアのミャンマー (ビルマ) の Pagan の寺や、インドネシアの中部ジャワのチャンディ・セヴ寺に影響を与えていると言われる。

Pāla王朝の第二の最盛期をつくった Mahipāla 1世 (988-1038年頃在位) がこの土地に精舎を建立し、ブッダガヤに仏像を奉献した。ボードガヤー出土の仏像台座銘文によれば、この Mahipāla 1世は Samatata 生まれで、Viryendra と称し、Somapuri Mahāvihāra に属する者であることが分かる⁽³¹⁾。

又、このソーマプリー大寺に住み、ソーマプラに Tārā の祠堂を建立した Vipulaśri-mitra (12世紀) は、ナーランダールの僧房を修理し、経函や仏像の寄進をしたと伝えられる⁽³²⁾。

前述の Vikramaśila Vihāra の大パンディタ Vairocanarakṣita(11世紀頃)は、この町

Somapura で Sacana 王の家系として生まれた⁽³³⁾。Atiśa やその師 Ratnākaraśānti⁽³⁴⁾ もこの大寺に住んでいたことがあるように、Magadha の諸寺院を勉強しながら行き来した僧侶が多い。

そこで、『チベット大蔵経』の奥書で、Somapuri 寺が明記されている用例の若干を挙げると次のようなものがある。

タントラ部に収められた論疏、Hevajra の Mahāmudrā の thig le 類に属する著作 Rahasyānanda-tilaka (གསང་ཆེན་དགའ་པོའི་ཐིག་ལེ།、大秘密歡喜明点、D.1345, P.2477) の著者は Mahāmati であるが、その奥書において、Mahāmati は Somapuri 出身の阿闍梨・比丘 Bodhibhadra の Lha ma であることが知られる。

中観部に収められた論疏、Bavya 作とされる Madhyamaka-ratna-pradipa (དབུ་མ་རིན་པོ་ཆེའི་རྒྱན་མ།、中観宝灯、D.3854, P.5254) は、その奥書から、後に Viryasimha (བརྗོན་འགྲུས་ཟེང་གེ།) とナクツォ翻訳官 རྒྱལ་ཁྲིམས་རྒྱལ་པ་ が Somapuri Vihāra で翻訳し、校閲し、決択されたことが分かる。

Mahipāla 王 I 世の息子、Nayapāla 王 (11世紀前半) ののち、Pāla 王朝の国勢が傾きはじめ、ベンガルはチョーラ王ラージェンドラ等によって荒らされた。例えば、約11世紀中頃に、Somapuri 寺の苦行僧 Karuṇāśrimitra は Vaṅgāla の軍隊(初代王 Jāta-varman) の放火によって彼の住居が焼かれ、死んだ⁽³⁵⁾、という記録がある。しかし、完全に破壊されることなく修復されたようである。ベンガルは、12世紀初めにその統治権がセーナ王朝に渡り、13世紀初めには、イスラム教徒の軍隊によって猛攻撃を受けた。

この Somapuri 寺は、その発掘調査の結果、大規模な破壊の跡が残っていなかったようである。イスラム教徒の侵攻の結果、ここの仏教徒は逃げ去り、別の住人が住み込んだりしているうちに、廃れていったのであろうか⁽³⁶⁾。

7. Jagaddala 寺

第14代 Rāmapāla (1077-1120年頃在位) は、都 Rāmavati を新しくつくり、Jagaddala Mahāvihāra を創建した。この Rāmapāla 王の保護によって、仏教は Varendra に普及したが、その中心は Jagaddala Mahāvihāra であったのである。

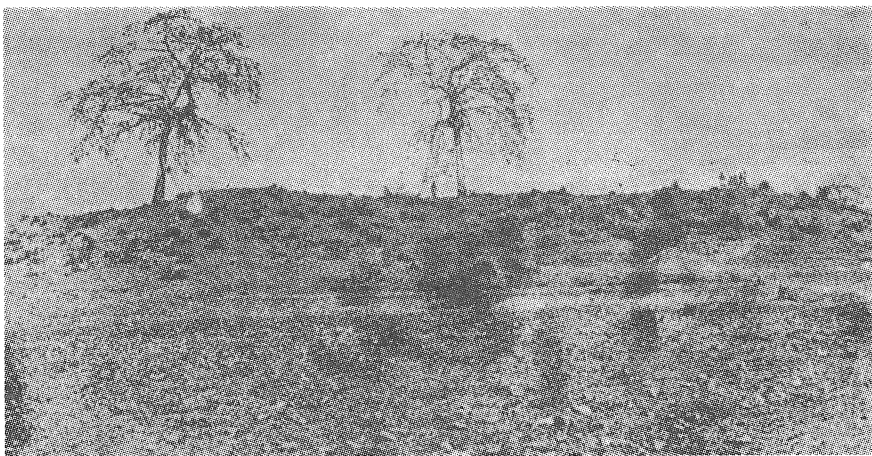
Jagaddala 寺は Varendra (バングラデシュの北部) の Dinajpur 地区にあり、Paharpur から北へ約10キロのところである。今もなお未発掘である。チベット資料の中に

は「インドの Orissa」にあったとする文献もある。例えば、ターラナータは、Paṇḍita Śākyaśribhadra は「東方の Orissa」の Jagaddala へお行きになり、そこで3年滞在なさってから、チベットへお行きになった、と述べる⁽³⁷⁾。しかし、Rāmapāla 王の頃は、内部抗争や外部からの侵入などのために国勢が傾きつつあった時であり、この王の勢力が及んだのは、Varendra (バングラデシュの北部) であったから、この王の保護による王立の Jagaddala 寺が Orissa にあった可能性は薄い⁽³⁸⁾。更には、後述するが、『チベット大蔵経』所収の著作の奥書 (D.2722=P.3542 や D.1732, P.2602 の奥書) には、「インド東方 Varendra の Jagaddala」とあり、Jagaddala は、やはり、バングラデシュのこの未発掘の処であろう。

そこで、『チベット大蔵経』所収の著作の奥書のなかで、この Jagaddala に関説したものを若干、紹介したい。

先ず、因明部に収められた Tarkabhāṣā (ཏོག་མེད་སྐད་, 思釈説、D.4264, P.5762) を著作なさった Mokṣākaragupta⁽³⁹⁾ は、Jagaddala Mahāvihāra の大学者にして比丘であることが、その奥書から分かる。

この Jagaddala Vihāra において作成された著作には、タントラ部に収められた Kriyā-tantra の意趣釈に属する Siddha-ekavira-tantra-ṭikā (དམའ་བོ་གཅིག་ཏུ་སྐྱབ་པའི་བྱུང་ཀྱི་འབྲེལ་པ་, 成就一勇者タントラ注釈、D.2674, P.3499) があり、これは、ここで Śubhākaragupta (Abhayākaragupta に従った学匠・得成就者で、Abhayākaragupta ののち Vikramaśīla 寺の座主を務めた)⁽⁴⁰⁾ が著されたと述べている。



Jagaddala 寺跡(未発掘)⁽⁴³⁾

次に、Jagaddala で翻訳された著作には、タントラ部に収められた Samvara-tantra 関係の論疏、Nag-po-pa 著 Samvara-vyākhyā (སྒྲིམ་མ་བཤད་པ་, 律儀注釈、D.1460, P. 2177) があり、ここで འོ་སྟོན་གྱི་ ཚེས་འཕུར་གྱི་ རྒྱུ་ があることがチベット語に翻訳したことを述べている。

中観部に収められた Bodhicaryāvatāra の註釈書、Bodhicaryāvatāra-tātparyā-pañjikā-viśeṣa-dyotani (བྱུང་རྒྱུ་བཞི་སྟོན་པ་ལ་འཇུག་པའི་དགོངས་པའི་འགྲེལ་བ་ཕྱད་པར་གསལ་བྱེད་, 入菩提行意趣注殊勝作明、D.3880, P.5282) は、インド東方の Jagaddala Vihāra の大パンディタ Vibhūticandra が著作し、かつ、チベット語訳もなされたことが、その奥書から分かる。

又、タントラ部に収められた Kriyā-tantra の意趣釈に属する、Śākyaśribhadra 著 Ārya-tārā-sādhana (འཕགས་མ་སྟོན་མ་སྐྱེད་པའི་ཐབས་, 聖ターラー成就法、D.3696, P.4519) は、インド東方の Jagaddala の大パンディタ Vibhūticandra によって翻訳された。

同じく、タントラ部に収められた Kriyā-tantra の意趣釈に属する、Candragomin 著 Manohara-pāpa-vidāraṇa-nāma-lokanātha-stotra (འཇིག་རྟེན་མགོན་པོའི་བསྟོན་པ་ཡིན་འཕྲོག་སྟོན་འཇོམས་, 世間尊讚意敵悪業摧破、D.2722, P.3542) は、インド東方 Varendra の Jagaddala の大パンディタ Dānaśīla が翻訳したのであり、タントラ部に収められた Cakra-samvara-tantra の成就法、Lūyipa 作 Śrī-bhagavad-abhisamaya (དཔལ་བཅོམ་ལྷན་འདས་མཛད་པར་རྟོགས་པ་, 吉祥バガボン現観、D.1427, P.2144) は、東方の Jagaddala の大パンディタ Dānaśīla によって、第2回目の改訂者として、註釈書に一致させて、若干校正された。

この Dānaśīla は、チベットにおいても翻訳活動をしている。つまり、阿闍梨 Lalitā-gupta 作 Śuklaika-jaṭi-sādhana (རལ་གཅིག་མ་དཀར་མོའི་སྐྱེད་ཐབས་, 白一髻母成就法、D. 1732, P.2602) の奥書では、Varendra における Jagaddala の Mahāpaṇḍita Dānaśīla がチベット中央の得成就者の住処 drañ sron srin poḥi ri (དྲམ་སྟོན་སྟོན་པོའི་རི་) において翻訳したと記している。

プトンは、カシュミールの Śākyaśribhadra がチベットへ行く時、上述の Vibhūticandra と Dānaśīla 等、9人が一緒にお伴をした、と言う。Hgos lo tsā ba gshon nu dpal (འགོས་ལོ་ཙ་པ་གཤོན་ལུ་དཔལ་) は、Vibhūticandra は Ko brag pa Bsod nams rgyal mtshan (ཀོ་བྲག་པ་བསོད་ནམས་རྒྱལ་མཚན་, 1182-1261) に招かれてネパールからチベットの diñ ri (དིང་རི་) へ行った、という⁽⁴¹⁾。

このように、Jagaddala 寺でも、テキストの作成や翻訳等がなされ、チベット仏教とも交流があり、タントラ、特に無上瑜伽部の密教が栄えたのであるが、12世紀末～13世紀初め、イスラム教徒の軍隊によって、各地の仏教寺院が荒らされ破壊されたので、カ

シュミールの Śākyaśribhadra のように、Vikramaśīla 寺からこの Jagaddala へ避難した仏教僧もいる。しかし、1203年頃の Vikramaśīla 寺の崩壊後、数年して、Jagaddala Mahāvihāra は衰退していったと推察される。⁽⁴²⁾。

8. 結 語

約8世紀から12世紀において、今のほぼインド国ビハール州と西ベンガル州、バングラデシュ国に相当するところを支配したパーラ王朝の4人の王によって建立された、王立の4つの大寺とそこに所属した仏教者たちの若干について考察した。そこで仏教、特にインド後期仏教（密教）が栄え、論典、テキストの作成やチベット語への翻訳も行われる等、仏教の研究の大センター、大学問寺であった。チベット仏教とも相互に交流が行われた。インドにおいては、ここがインド後期仏教（密教）の栄えた最後の拠点の1つであったのである。

注 記

- (1) Lama Chimpa & Alak Chattopadhyaya (trans.), *Tāranātha's History of Buddhism in India* (India, 1970), p.387.
- (2) D.4100 (P.5601)の奥書によれば、「Kapadhya 地方に生まれた多聞の阿闍梨 Bodhivarman の弟子にして、Bengal 地方に生まれた人といわれる説一切有部の阿闍梨 Prajñāvarman」とある。
- (3) スリランカ生まれの Jayabhadra は、Magadha に来て大乘を学び、特に秘密真言に精通し、Vikramaśīla 寺で Cakrasaṃvara を成就し、Vikramaśīla 寺の真言阿闍梨となった (A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione* (1863;rpt. Tokyo, 1965), pp.195-196)。
- (4) プトン仏教史 (Lokesh Chandra (ed.), *The Collected Works of Bu-ston*, Part 24 (New Delhi, 1971), 855) ; U. Wogihara (ed.), *Abhisamayālamkāraḥ Prajñāpāramitā-vyākhyā* (1932;rpt. Tokyo, 1973), p.994 では Trikaṭuka-śrīmad-vihāra とある。
- (5) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.175.
- (6) Dipak Kumar Barua, *Vihāras in Ancient India* (Calcutta, 1969), p.163; Advayavajra (Maitriṣa) については、H. Hadano, "A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tantric Buddhism in India—Advayavajra, alias Mñah-bdag, Maitriṣa—", (『羽田野伯猷著作集』Ⅲ、法蔵館書店、pp.166-181)。
- (7) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.124.
- (8) Rasmohan Chakravarty, *Contributions of Comilla to the Buddhist Culture in Ancient Times* (Comilla, 3rd ed. 1984), pp.29-33.
- (9) D. K. Barua, *Vihāras in Ancient India*, pp.179-180.
- (10) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.154; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang* (དཔག་བསམ་ལྗོན་བཟང་) (1908;rpt. Kyoto, 1984),

- Part 1, p.109.
- (11) D. K. Barua, *Vihāras in Ancient India*, p.180; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, pp.118,128.
- (12) Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals* (=Sata-Pitaka Series, Vol. 212) (New Delhi, 1974), 701; D.3128 (P.3949) の奥書のように、Vanaratna は「インド東方」の Sannagara の出身である。
- (13) G.N. Roerich (trans.), *The Blue Annals*, Part 1 (Calcutta, 1949), p.240.
- (14) パーラ王朝の諸王の名前とその在位年代については、諸説がある。S. L. & J. C. Huntington, *Leaves from the Bodhi Tree* (Seattle & London, 1990) によれば、第4代を Mahendrapāla 王 (約850-865年頃) とし、第21代 Palapāla 王 (約1180-1214年頃) までとする。今は一応、Sukumar Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India* (1962; Delhi, 1988) の説に従っておく。又、Rāmapāla 王の年代の立て方の相違によって、Jagaddala 寺は、この王によって保護されたが、その創建はこの王よりもう少しはやいとする見解もある。
- (15) Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals*, 217.
- (16) Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p.117; David Templeman (trans.), *The Seven Instruction Lineages by Jo Nang Tāranātha* (Dharamsala, 1983), p.67.
- (17) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.189; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p.121.
- (18) G.N. Roerich (trans.), *The Blue Annals*, Part 1, p.243.
- (19) Champa Thupten Zongtse (ed.), *The Biography of Chag Lo-tsā-ba Chos rje dpal (Dharmasvāmin)* (=Sata-Pitaka Series, Vol.266) (New Delhi, 1981), 50, 147; G. Roerich (trans.), *Biography of Dharmasvāmin (Chag Lo-tsā-ba Chos-rje-dpal), A Tibetan Monk Pilgrim* (Patna, 1959), pp.64, 93.
- (20) Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p.113.
- (21) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, pp.3, 195-199.
- (22) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, pp.178-185; Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals*, 185; Abhayakaragupta については、磯田熙文教授「仏教タントリズムの展開 (序) 一菩提心に視点を置いて一」(『日本文化研究所研究報告』第22、1986年)、pp.123-126。
- (23) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.192; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p. 121.
- (24) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, pp.175-177; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p.116; Jitāri については、白崙頭成教授「Jitāri一人と思想一」(木村武夫教授古希記念『僧伝の研究』、永田文昌堂、昭和57)。
- (25) Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals*, 927.
- (26) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.189; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, pp.120-121.
- (27) 奈良康明『仏教史Ⅰ』(山川出版社、1979)、p.401。
- (28) 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』(平楽寺書店、1979)、pp.209-210。
- (29) 水谷真成訳『大唐西域記』(平凡社、昭和47)、p.313:「伽藍は二十余カ所、僧徒は三千余人。大小の二乗を兼学し習修している。天祠は百カ所、異道の人々が雑居し、露形・尼乾[ジャイナ教]の派の人々がその仲間最も多い。」

- (30) S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, p.371。
- (31) 静谷正雄 『インド仏教碑銘目録』、p.199。
- (32) 静谷正雄 『インド仏教碑銘目録』、p.207。
- (33) Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals*, 747-750。
- (34) David Templeman (trans.), *The Seven Instruction Lineages by Jo Nang Tāranātha*, pp.67-68。
- (35) 静谷正雄 『インド仏教碑銘目録』、p.207; S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, p.376。
- (36) S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, p.376。
- (37) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, p.193; Chandra Das (ed.), *Pag Sam Jon Zang*, Part 1, p.122 にも同じような記述がある。
- (38) S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, p.377。
- (39) Yuichi Kajiyama, "An Introduction to Buddhist Philosophy, An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta," (『京都大学文学部研究紀要』第十、昭和41)、p.11。
- (40) A. Schiefner (ed.), *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in india propagatione*, pp.191, 199。
- (41) Lokesh Chandra (ed.), *The Collected Works of Bu-ston*, Part 24 (New Delhi, 1971), 886; D.S. Ruegg, *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India* (Wiesbaden, 1981), p.117 では、チベットの伝記は、Dānaśīla について、①Mahipāla 王と同時代のカシュミールの人、②Atīśa の師匠 (mkhas pa chen po Dā chen po)、③Śākya-śrībhadrā と同時代の人、以上の3人の Dānaśīla がいて、それらを区別しているという; Lokesh Chandra (ed.), *The Blue Annals*, 636。
- (42) S. Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India*, p.380。
- (43) A.K. Maitra, "The Ancient Monuments of Varendra," *Journal of the Varendra Research Museum*, Vol.5 (University of Rajshahi, 1979) 所収。

キーワード <パーラ王朝、ソーマプリ寺、ジャガッダラ寺、アティーシャ、バングラデシュ>